

Title	奥井復太郎の都市論：研究の出発点とその「交点」
Sub Title	
Author	田中, 重好(Tanaka, Shigeyoshi)
Publisher	三田社会学会
Publication year	1998
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.3 (1998. ) ,p.34- 38
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集I I : 奥井復太郎生誕102年記念シンポジウム
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-19980000-0034">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-19980000-0034</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 奥井復太郎の都市論 研究の出発点とその「交点」

田中 重好

### 1 はじめに

奥井復太郎の都市研究は、現在の都市社会学がカバーする領域に比べてはるかに広い分野に及んでいる。それは、奥井が社会政策論から出発して、都市政策、都市社会学へとたどりついた経歴からもうかがえる。

本論では、奥井の都市論を理解するために、奥井がどういった都市体験から都市研究に踏み込んでいったのかを整理し、その体験が彼の都市論にどういった交点を結んだのかを明らかにする。本論は、『奥井復太郎の「都市論」と「生活論」』（仮題、慶応大学出版会刊行予定）の掲載論文の前編をなすものである。

### 2 都市研究の出発点

奥井は、「東京の研究に関する限り、私は自分自身が非常に恵まれた位置にあるという事を有難く思っている。というのは私の一生が、この研究に対して恵まれた経歴をとっているという事である」（1960、著作集8巻6頁）と述べている。また、「独逸留学時代にうけた中世都市の魅力。帰朝忽々にして紹介された人間生態学の研究。この二つは大きく私の進路の転針に影響を与えた」（1962、8巻179頁）とも回顧している。奥井の都市研究を方向付たものは3つの契機であった。第一の契機は、彼自身の東京都市生活体験である。第二の契機は、留学中に体験したドイツ中世都市である。第三の点は、奥井の都市論に多大なる影響を与えたシカゴ学派の都市社会学との出会いである。

第一の契機である東京生活体験は、奥井自身の幼年期から青年期までの東京生活体験と、都市研究を志してからの東京体験に分けられる。奥井復太郎は1897年（明治30年）東京の下谷車坂に生まれ、7歳の時、本郷区千駄木林町に転居、さらに、本郷区駒込追分町に8歳の時転居している。小学校は地元の駒元小学校、中学から慶応普通部に通う。この期間は、明治末から大正中頃（明治30年～大正6年）にあたる。こうした奥井の都市生活体験は、その都市論の随所に現れる。

青年期までに経験した東京は、地元の町内社会と、それとは別世界の繁華街・中心街から構成されていたと奥井はいう。

その頃の町内社会を次のように描いている。「東京の山の手、本郷に永年住んでいた筆者は、明治末期大正初期の本郷に於ける商店街としては、本郷三丁目と肴町を記憶している。・・此の当時肴町の、僅か一町ばかりの町並がショッピング・センタアであって、夕

方からは雑踏を極めた。それでよく晩食後出かけたものだが何が面白かったか、と今きかれても一寸返事の仕方がない、別段に面白いものはなかったらしい。唯ぶらつくのである。」(1935、4巻19頁)。このように、人々は町内やその近所の街頭に皆出て夕方の時間をすごしたため、近隣の人々の交際は盛んであった。

そのため、明治の東京の町内社会は明確な輪郭をもった地域社会を成していた。「明治・東京の代表的市民は下町の商人と職人とであった。・・その第一〔の特徴〕が地元性、従ってモビリティの無い世界、所謂『町内』社会が考えられる。第二は伝統性であって、『しきたり』『きまり』が頗る有力な決定権を持っていた。第三には、かくの如くして当時の所謂商人道が成立していた。第四には山の手と下町とははっきりした社会的身分的相違を示していた」(1953、7巻9頁)。それゆえに、当時は「社会生活の単位は町内集団であった。・・それ丈けに・・町内の眼は光った。・・寺社の祭礼は正に町内の祭典であった。全町内あげての全体娯楽であって・・娯楽の少ないその時代はお祭りは勿論、寺や神社の縁日、夜店にあつまった」(1958、8巻49-50頁)。

こうした町内の狭い生活世界とは別に、東京には盛り場が成立していた。「此の頃、本郷の様な山の手居住者は、銀座迄はそう度々出掛けなかったらしい。年に何度と云う位」(1935、4巻19頁)出かけるにすぎなかった。当時の盛り場は近代的な場所と伝統的な場所に分化していた。「『銀座』は西洋臭い所で、少年時代の筆者には銀座はクリスマス・デコレーションと結びつけて懐かしい記憶がある。・・〔これに対して〕浅草は全然別の天地であった。元旦や酉の市に家人に連れられて行ったり、寺詣の帰途に立ち寄って食事や玩具を買って貰うのが頗る楽しみな土地である」(1939b、巻巻72頁)。

### 3 青年期以降の東京の生活経験

奥井の都市論は、大都市論に限定されている。『現代大都市論』のなかで、「現代に於いて都市とは何を指すか。云う迄もなく、資本主義社会と云う大社会生活の中心機能を蔽するものとして観察せらる可き都市、所謂大都市に外ならない。人口数上に仮定標準を設けるならば之れを百万単位を以てす可き都市に外ならぬ」(1940、5巻728頁)と述べている。「百万単位を以てす可き都市」とは、大都市を語るときの奥井の決まり文句であった。

奥井が都市論を構想してゆく現実の背景を振り返ってみると、まず第一に、明治後半期以降の東京大都市の膨張があった。その行政的表現が、15区から郊外区20区を合わせた「大東京」の形成であった。次に、こうした「大東京の成立」にともなって、東京の各地区は急速な変化をとげてゆく。それは奥井の議論によれば、「明治の町内」の解体と、「ビジネス・東京」の出現であった。それは、奥井自身が慣れ親しんできた東京の「地元」社会の消滅過程でもあった。しかし、第二にそれは、都市全体の図体だけが大きくなりながら、都市を支える骨格である都市の生活理念、市民の自覚、地方行政や政治が未成熟で

あった時代でもある。第三には、東京の発展は都市の外延的な発展、すなわち、急速に進む郊外化をもたらした。

急速な大都市の発展は当然のことながら、さまざまな都市問題の発生をともなっていた。大都市問題の山積は、単なる精神論的な対応ではすまなかった。明治末からの社会政策的な対応、1920年の都市計画法の施行、戦時体制に移行するなかでの国土計画が立案されていった。奥井の都市論は、こうした現実的要請を背景に構想されたものであった。最後に、これは都市には限らないが、この時代は大きな時代的な転換であった。特に、奥井が社会政策を論じ始めた時代の大正デモクラシーから急速な軍国主義化へ、さらに、戦後の「民主化」への転換があった。こうした都市・東京の変動を体験しながら、奥井の都市研究は進められた。

#### 4 東京の生活経験とドイツ中世都市

第二の契機は、1924年～27年の2年半の留学中に体験したドイツ中世都市である。そのことは、奥井自身が折に触れて紹介している。「独逸滞在中は、都市研究に関する限り独逸中世都市の魅力に圧倒された。・・ただ中世都市といっても私の興味の中心となったのはその形体であり建築であり且つ設計であった。・・中世都市は本当に素晴らしかった。廻らされた城壁と城門、その裡にぎっしり建てこまれた家屋、中央に聳える教会とその尖塔、ラート・ハウス、その全面にひろがるプラッツ、等は、それらいちいちの建築についてでなく、コンパクトな集団生活の形体として、これあるかなの感じを十分与えてくれた。ここにコミュニティーがあるという啓示であった。・・今日なお、これが・・私の綜合観の基底になっている事も否認することである」(1959、7巻5頁)。

以上で明らかとなったように、奥井にとってリアルな都市の世界は二つあった。一方には生活経験が染み込んだ明治の東京、他方にはドイツ留学時代の中世都市。たしかに、この二つの都市世界は、性格的にはまったく異なる。市民を中心とした都市自治の伝統が、空間的に統一を持って表現されているドイツ中世都市に対して、日本の東京は「東京人」が未成熟のまま、都市の自治もなく、都市空間も江戸から西欧近代までの雑多なシンボルに満ちあふれ、混乱していた。

しかし、この二つの都市が「奥井にとってリアル」だったのは、実際に自分自身がそこで暮らし、あるいは体験したということだけではなく、この二つの世界が共通して「都市の形や生活理念の点において、安定的な形や理念を持っていた」ためである。だが、こうした都市像の出発点を持ちながら、それ以降、奥井はついに、こうした安定した都市を眼前にはできなかった。奥井が眼にしてきたのは、つねに変化してやまない都市と都市の暮らしであり、都市の変化に十分対応できない都市生活者の姿であった。

#### 5 変動する都市とシカゴ学派

奥井自身が眼前にした都市の変化と混乱を捉える視角を提供してくれたのが、アメリカのシカゴ都市社会学であった。シカゴ学派との研究との出会いを奥井は次のように述べている。1925年頃、「都市本質論ともいべきものの探求に苦心して、私の所謂、中心機能の地域的結集という事を考え出し、ここに現代大都市への探求を一段と進めさせる事になり、他面シカゴ学派の影響は、専ら社会調査法に私を向かわしめると共にヒューマン・エコロジーは形体的社会論として私を捉え、遂にそれから脱する事の出来ない破目に追い込まれた。昭和十年代はそうした仕事に夢中になっていた。かくて出来上がったのが昭和十六年の『現代大都市論』であった」（1959、7巻6頁）。

シカゴ学派の影響を受けながら、都市の現実を解明するため、さまざまな実態調査が実施されていった。大学卒業生名簿などを利用した調査、電話・郵便・デパートの配達区域などを利用した大都市圏域調査、工場要覧・工場名簿による産業立地調査、警察署の戸口調査資料による三田地域社会調査、三田の学生の意識調査や学生の行動調査、鎌倉での地域住民への配票・自計式調査、東京の商店街研究調査などである。

## 6 都市への関心の交点と都市像

奥井は、自身の都市のイメージを内に秘めながら、都市論を展開していった。最後に、東京生活体験、ドイツ中世都市、シカゴ学派の都市社会学という複数の出発点が、最終的にどういった都市像を結んだのかを検討する。この都市像の結実を、都市研究の収斂した点と理想の都市像という二つの面から考えていく。

奥井は、戦後の都市生活論のなかで「生活信条」「生活理念」という形で、生活を自律的な、あるいは主体的に生活の内側から作り上げてゆく価値に注目した。生活理念や信条に、奥井の都市研究が収斂していった。「生活基盤—生活体制—生活信条という構造・・・人々の生活にはそれぞれ生活信条というものがある。・・・善悪可否の価値判断である。生活体制とは人々の生活の仕組みであり生活の形態とも考えられる。しかしそうした生活はその時代その処に於いて全体の社会的組織の上に成り立っているのである。その組織に当たるものが生活のよって立つ基盤であるが故に生活基盤と呼ばれる。これらの関係は一種の三位一体である」（1958、8巻48頁）。

生活理念への収斂は、都市の生活理念を結晶化できない、近代日本都市の生活のありよりの「逆さの像」であった。奥井は、戦後の都市生活者を「抛りどころのない」市民と捉えている。「大都市社会はそれ自体としては一方では人間解放にいちじるしい貢献をしている。・・・[しかし]解放されはしたが、まだ新しい倫理性を内に醇化しえぬ市民は自分をしっかりとつなぎ止めてくれる抛りどころのないものになってしまう」（1961、7巻8-9頁）。

奥井の都市論の交点は、生活理念を基礎とする都市の理想像としても収斂した。生活理念が安定的に確立し、しかも、個人の「小世界」である生活世界と社会全体の「大世界」

が融合した都市を理想として描いた。すなわち、「吾々が満足し得る都市の形態とは、恐らく自己の生活身边には円満なる空気につつまれた小世界を持ち乍ら、気宇・識見並びに製作に於いては最高の人間力・文化を、最高の道徳と精神とを、表現せしめる事が出来るものでなければならぬ。此の爲めには、大都市の素朴な解消を理想とすべきでなく、個人道徳（小世界）が社会道徳（大世界）に融合し得る教養と文化と創造とを具有した景観的表現を、現代都市に与えねばならぬ」（1939a、6巻186頁）という。

このように、奥井復太郎は、3つの都市の世界から出発し、最後に、都市生活理念へと収斂していったのである。

## 文献

- 1996 『奥井復太郎著作集』第1巻～第8巻、大空社
- 1935 「『盛り場』に関する若干考察」、著作集4巻所収
- 1939a 『都市経済論』、著作集6巻所収
- 1939b 「商店街研究の5」、著作集6巻所収
- 1940 『現代大都市論』、著作集5巻所収
- 1953 「明治・東京の性格」、著作集7巻所収
- 1958 「生活の歩み」、著作集8巻所収
- 1959 「都市研究への一回想」、著作集7巻所収
- 1960 「明治・大正・昭和の私」、著作集8巻所収
- 1961 「都市の生活環境」、著作集7巻所収
- 1962 「ぜみなある・回顧」、著作集8巻所収
- 1963 「再論『現代大都市論』」、著作集7巻所収

(たなか しげよし 弘前大学人文学部)